

A 用語集

アノイアンス 騒音による不快感の総称。音そのものの不快感と音に随伴して生じる不快感がある。日本語では「うるささ」をあてることが多いが、英語のアノイアンスは、振動や悪臭にも使われる。

一時的聴力損失 (TTS) 一時的閾値移動, 一時的閾値上昇, 一過性聴力損失などとも称される。閾値の一時的な上昇のことで, 回復可能である。騒音曝露に起因する TTS を NITTS (noise induced temporary threshold shift) と記す。NITTS は騒音曝露終了後ただちに回復し始める。その回復過程で, 曝露終了後 2 分までは回復が急速に進み, ときには閾値が曝露前のそれより低く測定され, 再び上昇する現象が見られることがある。これバウンス現象と称す。ただしバウンス現象が常に観測されるわけではない。これに対して 2 分以降では, 回復は時間の対数に対しほぼ直線的に経過する。曝露終了後 2 分の TTS はバウンス現象の影響を脱していると考えて, TTS を測定するときに曝露終了後 2 分の TTS₂ を観測することが多い。

伊藤らの予測式 臨界帯域説に基づき, 曝露音の大きさと曝露時間から TTS (一時的聴力損失) を求める予測式であり, 特徴は, 広いレベル (音圧レベル 65~95 dB) にわたり, 長時間 (24 時間まで) の騒音曝露に適用可能とされる点である。騒音のレベル変化を階段状の変化で近似して非定常騒音曝露による TTS を予測する方法 (単位階段関数法) と組み合わせることで, ごく衝撃的な場合を除いて, 任意の騒音曝露による TTS を予測することができる。テスト周波数 4 kHz における TTS の予測式は次式で表される。

$$\text{TTS}_0(S, t) = 0.106 \exp(0.114S) \times \frac{1 - \exp(-t/31.8)}{1 + 1.04 \exp(-t/337.6)}$$

ただし,

TTS₀: 曝露終了直後の TTS (dB)

S: 曝露音の TTS の臨界帯域の中心周波数におけるスペクトルレベル (dB)

t: 曝露時間 (分)

である。

因子分析 統計的な多変量解析手法の 1 つ。潜在的な複数の因子が観測可能な複数の指標に影響を及ぼしている, という統計学的なモデルを仮定し, 観測されたデータから潜在因子を抽出する。分析では, 因子を抽出した後, より解釈しやすい因子を導くために, 因子の回転を行う。回転の方法には, バリマックス回転やオプティム回転など, いくつかの方法が提案されている。

L_{eq} (等価騒音レベル) 変動騒音の評価量のひとつで, 音のエネルギーの時間平均値をレベルで表したもので, 一般環境騒音の評価量として国際的に広く用いられている。

L_{dn} (昼夜平均騒音レベル) 環境騒音を評価する場合, 昼間より夜間の方が騒音の影響が大きいという考え方に基づいて, 夜間 (22 時~7 時) の騒音のエネルギーに 10 倍の重みづけをして評価した 1 日の等価騒音レベルである。この量は, 1974 年に米国環境保護庁 (EPA) によって地域環境騒音の評価量として採用され, これに基づいた基準値が示されている。

横断的研究 (Cross-sectional study) 観察集団において, ある一時点における自覚症状の有症率, 臨床検査の成績, 健康障害の有無等と, ある注目する要因への曝露の有無との関係を調べる際に用いられる。疫学的調査の出発点で, 断面調査ともいう。一般に, 曝露の程度, 年齢, 性, 職業, 居住地域などに分けて比較が行われる。

オッズ比 (Odds ratio) 疾病の発症リスクなどを比較するための尺度として、一般に用いられている。対照群での比率を p_0 、曝露群での比率を p_1 とすると、オッズ比 OR は次式で表される。

$$OR = \frac{1 - p_0}{p_0} \cdot \frac{p_1}{1 - p_1}$$

両群に差がない場合、オッズ比は 1 となり、曝露群での比率が高い場合は 1 以上の値となる。 p_0 、 p_1 の値が十分に小さい場合には、 $1 - p_0 = 1$ 、 $1 - p_1 = 1$ と近似できるため、オッズ比は相対危険度 ($= p_1/p_0$) と一致する。多重ロジスティック分析では、独立変数として投入した各要因の影響を、他の要因の影響を調整した調整オッズ比として得ることができる。

オブリミン回転 因子分析においては、抽出された複数の因子に対して新たな因子軸を設定することで、より解釈の簡単な因子に変換する方法が一般的に行われる。オブリミン回転は斜交回転の 1 種で、単純化された解釈のしやすい因子を得ることができる。ただし、バリマックス回転のような直交回転と異なり、因子同士が互いに相関関係を持つことになる。潜在因子間で相関関係があると考えの方が妥当な場合には、広く使われているバリマックス回転よりも、オブリミン回転の方が適しており、実質的な意味を持つ因子を抽出できることが多い。

外言化経験 外言は言語が本来もっている伝達の機能を果たす行為であり、社会的言語行為とも呼ばれる。相手に判らせることをその目的としているため、音声化され、文法的に十分展開された形式を持つ。尚、本報告書で引用した内田 (1975) の研究における外言化経験とは、実験者が読み上げた物語文を被験者である幼児が、声に出して復唱する手続きのことを指している。

拡張 Mantel 検定 統計的検定の 1 手法。複数の曝露水準があるような場合に、ある事象の起こる比率が各水準ごとに増加 (減少) するような、量反応関係の有無を分析する際に用いる。我が国では、このようなデータに対して、 χ^2 検定を適用している例が多く、曝露水準などの順序情報を無視して

検定することになり、誤った結論を導いていることも多い。

環境基準 生活環境を保全するために望ましいとされる行政上の目標値。特に法的強制力はないが、騒音公害の裁判では、曝露の受忍限度を判定する上で重視される。

患者対照研究 (Case-control study) 健康障害の原因を、過去にさかのぼって探そうとする研究で、後ろ向き研究 (retrospective study) ともいう。ある疾病 Y の患者 (case) と疾病 Y でない人、すなわち対照 (control) とからなる研究集団を選び、注目する要因 X に曝露された者の割合を、患者群と対照群において比較することによって行われる。ある健康障害と注目する要因との関連の強さは、相対危険度の近似値であるオッズ比によって示す。

気導聴力 気導受話器で外耳道から与えられた空気伝導音によって測定された聴力の閾値。

クラスタ分析 各標本のデータから標本間の距離や類似度を定義し、似通った標本を集めることで、標本の分類を行う多変量解析の 1 手法。標本間の距離や類似度を求め、最も距離の近い (似通った) 標本同士を 1 つの標本群に統合するという方法を繰り返すことで、階層的に標本群の数を減らし、大きな群に統合していく。距離や類似度については、様々な尺度が提案されており、標本群同士を統合した後の距離 (類似度) の再計算方法についても、各種の方法がある。クラスター分析の結果であるデンドログラムは、標本が統合されていく様子を表した図である。

高音急墜型 高音域のみの聴力損失で高音になるほど聴力低下が著しい場合、オーディオグラムは高音部の急峻な低下を示す像になる。結核の治療に用いられるストレプトマイシンによる難聴が典型的である。

高音部の dip 型 谷型を示す聴力像で谷のピークの周波数が高音部にあるものをいう。従来騒音性難聴初期の聴力像は 4000 Hz 付近の dip 型 (c^5 -dip) とされてきたが最近では dip の位置は 3000 から

6000 Hz の帯域にあることから c^5 -dip に限らない高音部 dip 型と理解されている。

骨導聴力 バイブレータ形式の骨導受話器を耳後部や前額部で頭蓋骨にあてて測定された聴力閾値。骨導音は耳の伝音機構の状態とあまり関係なく内耳に達して音を感じさせるので、内耳あるいは中枢に障害がなければ正常を示す。気導聴力と比較することによって伝音性難聴、感音性難聴、混合性難聴の鑑別に用いられる。

コホート研究 (Cohort study) 前向き研究 (prospective study)、**縦断研究 (longitudinal study)**、**追跡研究 (follow-up study)** ともいう。注目する疾病 Y の非罹患者を研究対象とし、要因 X の曝露群と非曝露群からなる研究集団を選ぶ。この研究集団をコホートという。コホートを一定期間追跡し、曝露群と非曝露群の両群における疾病 Y の発生率を比較する。関連の強さは、相対危険度を指標にして評価する。因果関係の立証には有力な方法であるが、時間や費用の点で実施することが困難な場合が多い。

コーネル医学指数 (Cornell Medical Index)

ニューヨークの Cornell 大学の Brodmann や Wolff らによって、患者の心身両面にわたる自覚症状を比較的短時間のうちに調査することを目的にして考案された質問紙法による心理テストである。原法は身体的自覚症状についての質問項目 144 問と、精神的自覚症状についての質問項目 51 問、合計 195 問から構成されている。元来は内科領域における神経症傾向のスクリーニング法として用いられたものであるが、心身両面の自覚症状を短時間に調査するのに適した心理テストとして今日活用されている。

再生・再認課題 記銘した内容を保持しているかどうかを調べるための方法として再生法と再認法があり、その場合に用いる課題のことを指す。再生法 (recall method) は記銘した内容を正確に再現させる方法である。例えば、ある図形を提示し、それを隠した後、白紙を与えてその図形を描かせたりする方法である。再認法 (recognition method) は記銘した内容であるかどうかを確認させる方法で

ある。例えば、一連の単語を記銘した後、多数の単語の中から記銘したものを選ばせたりする方法である。

1/3 オクターブバンドレベル 周波数に関して特定の比で区切ったフィルタの帯域幅について、上下の遮断周波数の比が 2 となる帯域をオクターブバンド、 $2^{1/3}$ となるものを 1/3 オクターブバンドという。1/3 オクターブバンドレベルとは、1/3 オクターブバンドのフィルタを用いて音響測定を行ったときに観測される音圧レベルであり、観測対象の音響エネルギーのうち当該 1/3 オクターブバンドを通過するエネルギー成分に関するレベルである。

c^5 -dip 音階の c^5 (物理調で 4,096 Hz) 付近に局限した聴力の低下をいう。オーディオグラムの 4,000Hz において谷 (dip) を形成することにちなむ呼称。騒音性難聴初期に必発の特徴的な聴力像であるが、時に頭部外傷後の難聴や原因不明の場合がある。

ジャックナイフ法 推定量の分布、分散等、統計的な誤差の程度を推定するための手法。理論や数式に基づいた解析を、乱数を用いた計算機上での処理に置き換えて実行する方法である。実際に得られた標本を母集団のように扱い、標本抽出操作を多数回行うことで、平均値、相関係数など各種統計量の分布を推定する。推定した分布と実際に得られた統計量を比較することで、統計量の検定を行うことも可能である。母集団の分布型を仮定せずに推定・検定が行え、きわめて応用範囲が広い。同様な手法にブートストラップ法があり、標本抽出の際に、同じ標本が重ならないようにする (ジャックナイフ法) か、重なることを許可する (ブートストラップ法) かが異なる。

重回帰分析 統計的な多変量解析手法の 1 つ。多変数データのうち、ある特定の変数を目的変数とし、他の変数 (説明変数) で説明しようとする手法である。目的変数 y を p 個の説明変数 x_1, \dots, x_p で説明する関数 (重回帰式) $y = f(x_1, \dots, x_p)$ を、標本の値を用いて導出する。関数の形は一般には不明であるので、モデルによって与えられる。多くの場合、単に重回帰分析と言うときには線形モデルを用いた重回帰分析を指す。

進行型 騒音性難聴初期の特徴的な聴力像である c^5 -dip に加齢による聴力低下が加わり dip が不明瞭となるなった状態。加齢の影響が軽い場合は年齢補正により dip 型の聴力像が得られる。

信頼区間 統計的推定において、ある未知の母数 θ (例えば平均値) を推定する場合に、 $a < \theta < b$ である確率が α であるとき、区間 (a, b) を信頼度 α の信頼区間である、という。

正確検定 多くの統計解析の手法では、仮説検定での有意確率を求める際に、正規分布や χ^2 分布などを利用して近似的な確率値を求めるが、標本数が少ない場合などには、この近似が必ずしも適切でない。正確検定は、有意確率を正確に求める方法であり、 2×2 分割表については、Fisher の正確検定が広く知られている。計算機を利用することで、 $m \times n$ 分割表のようなケースでも正確な有意確率を計算できる。ただし、データ数が多い場合には、乱数を使った手法の方がより短時間で正確な有意確率を算出できる。

騒音コンター コンターとは等高線のことである。騒音曝露量の等しい地点を地図上に結びと、騒音曝露に関するコンターが引かれる。

多重ロジスティック (回帰) 分析 統計的な多変量解析の 1 手法。疾病の発症や地震の発生など、ある事象が起こる確率を複数の要因から予測するための回帰式を導くことができる。分析の際には、従属変数 (目的変数) として疾病の有無のような 2 値データを入力し、独立変数 (説明変数) としては、性別のようなカテゴリー変数あるいは身長のような連続変数を複数入力することができる。得られた回帰式により、疾病などの生じる確率を複数の要因から推定することが可能であり、各要因の影響の程度はオッズ比として得られる。同様な分析手法に判別分析があるが、多重ロジスティック分析の方が適用の際の仮定や制限が少なく、得られた結果の信頼性も高いとされている。また、判別分析は疾病かどうかの判別は可能であるが、その確率の推定はできない。特に疫学調査では、多変量で調整されたオッズ比を推定するための必須の分析手法として利用されている。

田中ビネー知能検査 1905 年、フランスのビネーとシモンは知的発達の遅れた子どもを正常児から鑑別するために個別式の知能検査を作成した。その後、1937 年にアメリカのスタンフォード大学のターマンがこれを大規模に標準化し、ドイツのシュテルンが提案した IQ (知能指数) の概念を採用して、スタンフォード・ビネー知能検査が作成された。1954 年、この検査を田中寛一が日本人向けに改訂したものが田中ビネー知能検査である。年齢段階ごとに問題がやさしいものから難しいものへと配列されている。高年齢までの適用、生活に近い問題、採点の容易化などの特徴を持つ。1970 年に田中教育研究所が新訂版を出し、その後も数度、改訂版が出されている。

短期記憶 容量が小さく、しかもそのまま何もせずにいると急速に消失してしまう記憶を短期記憶という。通常、長くても約 1 分間しか情報を保持することはできない。また、短期記憶は記録後の他の活動の影響を受けやすく、すぐ再生不能になってしまう傾向がある。例えば、電話番号を電話帳で調べてから、いざ受話器をとり、ダイヤルボタンを押そうとしたときに早くもその番号が不確かになっている事がある。このように短期記憶は復唱 (リハーサル) なしではすぐに忘却されてしまう。次第に個数が増える数字列や無意味な文字列を材料として調べると、成人では通常、7 項目前後 (7 ± 2) のところに限界があることがわかっている。

長期記憶 ほぼ無限の容量を持ち、かなり長い期間情報を保持しておくことのできる記憶を長期記憶という。一般に、入力された情報はいったん短期記憶として保持され、多くの処理過程を経て、最後に長期記憶に移行するとされている。タルビングによると、長期記憶は個人の過去経験に関する記憶 (エピソード記憶) と、言語や概念などの一般知識に関する記憶 (意味記憶) に分けることができる。長期記憶の情報は、普段は意識されない状態ではまわられているが、思い出そうとすると即座に意識に呼びもどすことができる。これは情報がきちんと整理され、構造化されている証拠である。

聴力損失 聴力損失は、聴力の閾値レベルの上昇、ある

レベルから他のレベルへの閾値上昇，定性的な意味での聴力の低下として使われてきた。一方，難聴という用語も，一般に聴力の部分的低下もしくは聴力の部分的低下と消失（いわゆる聾）の両者に対して使われてきた。騒音曝露に起因する聴力の低下に対しては騒音性難聴という用例と騒音性聴力損失という用例があるが，最近の耳鼻咽喉科学会あるいは聴覚医学会では「騒音性難聴」をもちばら使用しているので，この語を用いる十分な理由がある。しかし 5 dB 程度の騒音性の閾値上昇を騒音性難聴と称するのは適当と思われないので，本報告書においては「聴力損失」を用いることとする。ただし加齢に伴う聴力の低下に対して「損失」と称することは，騒音曝露による聴力損失とはおもむきが異なるので「聴力低下」を用いることとした。

聴力レベル 英語の hearing level に相当する。オーディオメータの 0 dB の音圧を基準音圧として表示した音圧レベルをいう。通常の音圧レベルからオーディオメータで 0 dB となる音圧レベルを引いた値である。

TTS 一時的聴力損失

ティンパノメトリ 外耳道圧を +200 mm 水柱から減圧していく際の中耳の可動性の変化を調べる検査。描出された波形をティンパノグラムといい，A 型，B 型，C 型がある。波形が山形でピークが外耳道圧 0 mm 水柱付近にあるものを A 型という。中耳が正常の場合は A 型を示す。

トレンド検定 量反応関係の検出を目的とした統計的な検定手法。薬の効果や曝露の影響を検討する際に，複数（3 以上）の投与水準あるいは曝露水準があるときに用いられる。曝露量が増加するにしたがって，ある反応が増加（減少）する傾向（トレンド）があるか否かを検討する。直線的な増加（減少）傾向を仮定した検定方法がよく利用されているが，直線性を仮定しない検定方法もある。我が国では，複数の曝露水準があった場合，分散分析のような曝露水準の順序情報を無視した，誤った分析手法が適用されることが多い。順序情報を無視することで，曝露との関連の有無に

る有意確率が過大に算出される結果となり，関連が認められないという誤った結論が導かれることがある。

内言化経験 内言は自分の行為の計画を立てたり，調整したり，思考の支えとしての役割を果たす言語行為であり，非社会的言語行為とも呼ばれる。内言は，(1) 音声化されない，(2) 述語主義的構文をとる，(3) 語と語の意味は非文法的に結合する，(4) 本人にしかわからない語の用法がある，などの特質を持つ。なお，本報告書で引用した内田（1975）の研究における内言化経験とは，実験者が読み上げた物語文を被験者である幼児が，声に出さず，心の中で復唱する手続きのことを指している。

2 値データ（2 値変数） 疾患の有無など，2 通りの値しかないようなカテゴリ変数。身長など連続した値の変数であっても，特定のしきい値を超えるかどうかで，2 値データに変換することができる。変換することで情報量は減ることにはなるが，医学的に解釈しやすい結果を得るために，連続した変数を 2 値データに変換して解析することも多い。多重ロジスティック分析では，従属変数（目的変数）として，2 値データを入力する。

バリマックス回転 因子分析においては，抽出された複数の因子に対して新たな因子軸を設定することで，より解釈の簡単な因子に変換する方法が一般的に行われる。バリマックス回転は最も広く使われている変換方法であり，直交した（各因子の軸が直角に交わった）因子を得ることができる。因子間に相関関係がないため，各因子の影響を独立に考えることが可能である。

PTS 永久的聴力損失を PTS という。騒音曝露に起因する PTS を NIPTS（noise induced permanent threshold shift）という騒音曝露と NIPTS との関係を考える場合，加齢による聴力低下を除いて測定することができないので，単に PTS と言えば加齢および騒音曝露の両者による聴力損失を指す。加齢による聴力低下を除いた騒音曝露のみによる聴力損失は，PTS から加齢による聴力低下分を差し引いてを推定される。これが NIPTS である。

標準偏差 観測データの散布度として最もよく用いられるもので、平均値からの偏差の二乗平均によって求められる。

ブートストラップ法 ジャックナイフ法

ペアマッチによる比較 調査結果に影響を与えそうな交絡要因をあらかじめ取り除くために、実施(実験)群と対照群との間で性別、年齢、家族構成などを対応させたペア (matched pair) を設定する。そして両群から得られた調査データの解析を行うことで、両群間における調査要因のみに関連する差異を取り出そうとする統計的手法である。

Bonferroniの方法 統計的な検定を多数行くと、違いがないにもかかわらず違いがあると結論してしまうような、誤った判断(第1種の過誤)をする確率が大きくなる。有意水準5%での検定を n 回行うと、第1種の過誤の確率は最大で $1-(1-0.05)^n$ まで上昇する。これを避けるために、分析方法に応じたいくつかの手法が考案されている。Bonferroniの方法は、 n 回検定を行う場合、有意水準 α の代わりに α/n を用いて検定を行う。検定全体として第1種の過誤の確率が α 以内に収まることになるが、比較的保守的な手法であり、有意差が検出されにくい。複数の群同士の組み合わせで多重比較を行うような場合だけでなく、任意の多重検定に応用可能な手法である。

ミネソタ多面的人格目録 (Minnesota Multiphasic Personality Inventory: MMPI) Hathaway と Mckinley によって1946年に発表された人格目録で、人格特性を多面的にとらえることを目的として作成された質問紙法による心理テストである。本テストは9臨床尺度(心気症、抑うつ性、ヒステリー、精神病質、男女性度、偏執性、精神衰弱、精神分裂、軽躁性)と4妥当性尺度(疑問点、虚構性、妥当性、修正点)の合計550項目から構成されている。これらの尺度の得点を算出し、臨床尺度のプロフィールパターンから人格特性を判定するが、その際臨床診断尺度の得点が70点以上は異常とされている。本テストは精神医学または心身医学的診断の補助的検査として、また治療効果の判定にも応用されている。

明瞭度 試験用音声として発声された音声単位の総数のうち、正しく聞き取れた割合を百分率で表したものを明瞭度という。使用される音声単位が単音の場合は単音明瞭度、音節の場合は音節明瞭度という。3連音節明瞭度は、無意味3音が連なる音節を用いたときの明瞭度である。室内に残響がある場合などには、3連音節明瞭度試験を行うことによって、室内での聞き取りのよしあしを評価し、あるいは相互比較することができる。

矢田部ギルフォード性格検査法 (Y-G 性格検査法) Guilfordらが考案した人格目録をモデルとして矢田部達郎らが日本化した質問紙法による性格テストである。本テストは12測定特性より構成され、さらに各12特性は10問ずつ計120問の質問項目よりなる。テスト結果による粗点から5段階得点を求め、さらにプロフィールを作成し、平均型、右寄り型、左寄り型、右下がり型、左下がり型の5類型に分け疑問型を含め計16種の型に分類して診断する。

有意確率 統計的仮説検定において、仮説が真であったときに、それに対応する標本の値が生起する確率をいう。この有意確率が十分に小さい場合、標本の仮説からのずれが統計的に無視できない(有意)ものであり、仮説が真でないとは判断する(棄却する)に十分な証拠と考える。

予防原則 1992年にリオデジャネイロで開かれた国連環境会議ではじめて登場したもので、その定義は次のようなものである。「環境を守るために予防的なアプローチがそれぞれの国の能力に応じて広く適用されなければいけない。深刻な、あるいは不可逆的な損傷の起こる恐れのある場合、科学的確実さが十分でないからといって、それを理由にして環境破壊を防ぐための費用-効果的に意味のある施策を延期してはならない。」

リクルートメント現象 音の強さを増していくと、音の大きさの感覚が通常人に比べて異常に増加する現象である。この現象は内耳性聴力損失に特徴的に現れ、騒音性聴力損失の特徴の一つになっている。

両側検定 統計的検定において、仮説の棄却域を、検定統計量 T の標本分布の上側および下側とする検定

である。両側検定に対立するものとして片側検定がある。両側か片側かの選択は対立仮説による。たとえば、帰無仮説 $H_0: \mu = \mu_0$ に対して、対立仮説が $H_1: \mu \neq \mu_0$ のとき両側検定が必要であり、 $H_1: \mu < \mu_0$ あるいは $H_1: \mu > \mu_0$ のとき片側検定が必要である。

量反応関係 生体の集団に一定量の化学物質を投与し、あるいは一定強度の外的刺激を与えた場合に、生体がこうむる特定の影響（例えば死亡）の発現する割合（＝反応率）は、投与量あるいは刺激強度（量）によっておおむね定まり、量を変えれば反応率も変化する。量を横軸にとって反応率を縦軸にとると、多くの場合両者の関係は S 字状の曲線となる。これを量反応関係という。ちなみに致死量はふつう 50% の死亡率をもたらす投与量をいう。

臨界帯域 聴覚に関連する現象の態様が急に変化する周波数の帯域のことをいう。H. Fletcher が 1940 年にマスキングを説明するために初めて用いた概念で、一種のフィルタが聴覚内に内在すると考え、そのフィルタの帯域間を臨界帯域幅という。TTS の臨界帯域説は、1966 年庄司らによって提唱された。それによると特定の周波数の聴力に影響を与える雑音の成分は臨界帯域内の成分のみである。その臨界帯域の中心周波数は、聴力のテスト周波数から約 $1/2$ オクターブ低域にずれていて、帯域幅もマスキングの臨界帯域幅に比べて広い。

ロールシャッハテスト 1920 年、スイスの精神科医ロールシャッハ (Rorschach, H.) によって考案された人格検査である。様々な事物・人物・生物・植物などに見立てることのできるインクプロット（インクで作ったしみ）を印刷した 10 枚のカードを順序よく被検査者に示し、これに対する自由な反応について多方面から検討を加えて人格を明らかにしていくもので、被検査者の知的側面、適応や成熟度、情緒の安定性など、人格の一般的・基本的な面をとらえることができる。実際の心理臨床現場において、かなり使用頻度の高い投影法の 1 つである。

WAIS 知能診断検査 Wechsler Adult Intelligence Scale のことで、1939 年、ニューヨークのベル

ビュー病院のウェクスラーによって作成された成人用個別知能検査である。6 種の言語的・数学的用具による言語性検査と、5 種の非言語的・具体的用具による動作性検査に分け、それぞれの IQ（知能指数）と全体 IQ がもとめられる。日本では南らによる改訂版、児玉らによる日本版がある。

WECPNL 航空機騒音の評価量のひとつ。日本では航空機騒音に係る環境基準に用いられている。算出方法の詳細は第 2 章参照。